

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷一十二第

行發日一月二十年四十四正大

(禁轉載)

論叢

財産税に於ける都鄙の對立……法學博士 神戸 正雄

人間愛の起源……教授 川村多實二

純正現象學の方法論及び問題論……文學博士 米田庄太郎

時論

勞働組合としての小作人組合……法學博士 河田 嗣郎

食料増殖問題と林業政策……法學博士 山本美越乃

說苑

岡山藩と大阪との海運……經濟學士 黒 正 巖

市町村の混合企業に就て……經濟學士 小山田 小七

歐洲に於ける家産運動及び家産制度……經濟學士 八木芳之助

雜錄

ヒルファディングの恐慌の意義について……經濟學士 谷口 吉彦

妙心寺の財政組織……經濟學士 中川與之助

法令

農林省統計報告規則・會社統計規則

附錄

本誌第二十一卷總目錄

純正現象學の方法論及び問題論

(フツサールの現象學 六)

米田庄太郎

- A、方法論的豫備考察
 - B、純粹意義の一般的構造
 - C、ノエジスとノエマ
 - D、ノエジ斯的ノエマ的構造の問題論に就て
- } 本號掲載

(A) 方法論的豫備考察 フツサール氏は先づ方法論的豫備考察として、現象學の最一般的なる方法論的思想を論述して居るが、其の大意は左の如くである。

今現象學が一の純粹記述學たらんとするに於ては、其の方法の最一般的なる方面は、全く一の自明的なるものとして豫め與へられて居ると考へ得られる。要するに現象學は純粹意識出來事を眼前に置き、之を完全に明亮ならしめ、此の明亮性の範圍内に於て之れに分析及び本質把握を施し、其の洞見の本質結合を探究し、當面に觀照されたるものを、誠實に概念的なる表現に於て把

捉せんとするのである。此の方法は素朴的に行なはれるに於ては、先づ只新しき現象學的範域に於て、其處此處を見廻はし、一般的に觀照把捉及び分析を行はせ、其の與へられたるものを僅かに知らしめるに役立つだけであるが、然るに此の方法の本質、夫れに於て現はれる所與の諸種類の本質、完全なる明亮及び洞見並に完全に誠實なる且つ確定されたる概念的表現の本質、作業及び條件等に關して、學的反省を加へると、此の方法は一般的に且つ論理的嚴格に基礎附けられ、學的方法の性質を具へ、學的方法の位を有するに至るのである。そうして此處に現象學が、夫れ自身に本質的に結び附けられて或は基いて居ることは、左の點に於て明らかに示される。即ち組織的反省に於て、明亮、洞見、表現及び其他の稱號の下に考へられ確定されるものは、夫れ自身現象學的領分に屬するものなること、一切の反省的分析は現象學の本質分析にして、其の確定に關して獲得されたる方法論的洞見は、現象學の本質分析が設定する規範の下に立つこと。かくて我々は新しき反省にありては、方法論的言表に於て言表されたる實質關係は、完全なる明亮性に於て與へらる可きものなること、又此の場合に用ひられる概念は、與へられたるものに現實に眞に適合すること等を、常に確かめることが出來なければならぬ。

現象學の最一般的なる方法論的思想を右の如くに述べたる後、フッサール氏は次に進んで「完全に明亮なる本質把捉の方法」(Die Methode vollkommen klarer Wesenserfassung)を論述して居

るが、其の大意は左の如くである。

今我々が我々の探究眼を體驗の上に投ずると、體驗は一般に空虚性及び漠然たる遠隔性に於て現はれ、我々は之を其の儘に特異的確定にも、亦本質的確定にも附することが出来ない。そうして漠然意識されたるものが、其の特有の本質を興へるとすれば、其の興へるものは又一の不完全なるものであらざるを得ない。かくて流轉する不明亮性に於て、又大なり小なりの直觀遠隔に於て、當面に浮動するものに就て、之れに相應する本質直覺を行なふ爲めには、吾人は之を正常的接近 (die normale Nähe)、完全なる明亮性に引き寄せることが肝要である。

是に依りて見れば、本質把握其物も浮動する個別の如くに、其の明亮性階段を有することが知られる。尙ほ各本質に對して、云はゞ一の絶對的接近なるものが存在するので、夫れに於ては本質の所與性は此の階段列に關して一の絶對的なるもの、即ち純粹自己所與性 (reine Selbstgegebenheit) である。要するに對象的なるものは、常に一般に「夫れ自身」として探究眼の前に立ち、又「興へられて居る」として意識されるのみならず、全く夫れ自身に於てあるがまゝの、純粹に興へられたる「夫れ自身」として立ち、意識されるのである。そうして此の完全明亮性の對極たる完全不明亮性の場合に於ては、何物も興へられず、意識は「暗い」、最早全く直觀しない處の、嚴密なる意味に於ては一般に最早「興へない處」のものである。

されば精蜜な意味にて云ふ處の與へる意識と、非直觀的なものに對する直觀的なものと、暗いものに對する明亮なるものは相合致し、隨ふて所與性、直觀性、明亮性の諸階段は相合致するの　ある。「零」極限は暗黒性にして「一」極限は完全なる明亮性、直觀性、所與性である。

我々は更に所與性或は明亮性の階段に就て、明亮性の眞實なる漸次的階段と、非眞實明亮性階段即ち明亮性の範圍の外進的擴大(場合によりては同時の強度的明亮性増上の下に行なはれる)とを區別せねばならぬ。既に與へられ、現實に直觀されたるもの、例へば一の音或は色は大なり小なりの明亮性に於て與へられ得る。此處に直觀的に與へられたるもの以上に亘る一切の見解を除いて考へると、我々は直觀的なものがまさしく現實に直觀的である枠内に動く漸次的濃淡を取扱ふ可きである。我々はあるがまゝの直觀性に就て、明亮性の稱號の下に、零度の強度から高まり行くが、上の方で確定せる極限を以て終結する處の、連續的な強度差別を立てることが出来る。そうして此の極限は、より低き階段によりて或仕方で暗示されると考へ得られる。例へば我々は一の色を不完全なる明亮性の一様式に於て直觀しつゝ、しかも其の色を「夫れ自身に於て」ある通りに、即ちまさしく完全明亮性に於て與へられる通りに、考へ得るのである。

然るに直觀的に與へられたるもの以上に達する見解が、現實に直觀的な見解と空虛見解(「*erfassung*en」)とを組み合せ、そうして準階段的或は準漸次的に空虛表象的なものが漸次に直

觀的になり、或は直觀的なるものが漸次に空虛表象的となり得る場合には、事情は全く變つてくる。此處では明亮化と云ふことは、相互に結合する二種の過程に於て、即ち直觀化の過程、及び既に直觀的なるもの、明亮性増上の過程に於て、成り立つのである。

正常的明亮化の本質は右に述べしが如きものにして、夫れは本來、絶對的に疑ひなき同一化及び區別、解明、結び附け、其他を遂成させ、かくて一切の「論理的」作用を「洞見的」に完成させるものである。そうして本質把握の作用も亦之れに屬するのである。かくて本質學の方法一般の根本的一部分たる完全明亮本質把握の方法は、一般的 一歩一歩的進行を要求する。そうして本質把握に役立つ個別直觀は、一の本質普遍者を完全に明亮に獲得させるに至るまで、漸次的に明亮となり得るが、併し指導的志向を獲得させるに至るまでは進まない。一緒に組み合はされたる本質の更に詳しく規定の方面に於ては、明亮性は缺けて居る。されば標本的個別者を更に近づけ或は接近させ、明亮にすること、或はよりよく適切なる個別者(混亂と暗黒の中に、志向されたる個別的傾向が高調されて、最明亮なる所與性に齎らされ得る處の)を新に見出すことが肝要である。

尙ほ此處に本質把握の方法の特に重要な一特徴として、注意す可きものがある。夫れは自由想像 (frei Phantastien) が知覺に對して優位を占めると云ふことである。幾何學者は其の探究的思惟に於て、知覺よりは遙かに多く想像に訴へて進むが、現象學者も一般的には同様であるので、

吾人は想像或は假作 (fiction) は一切の本質學の生命要素である如くに、現象學の生命要素にして、「永久的眞理」の知識が、其の養液を汲み出す泉であるとも、云ひ得るのである。

フッサール氏は夫れより更に進んで、一の本質學としての現象學の任務を、全く記述的のものを見るは、果して正當であるやと云ふ問題を呈出し、先驗的純粹體驗の記述的本質論としての現象學の特質を、數學的諸學科の特質や、記述と精密規定、記述學と精密學との區別及び關係等を論究して究明し、記述學としての先驗的現象學は、數學的諸學科とは本質學の全く異なる根本部類に屬するものなるを明らかにして居る。此處にフッサール氏の所論を詳しく述べることは出來ないが、要するに數學は精密學或は精密の本質學であつて、精密規定に於て其の特質を發揮するものであるが、併し精密學は記述學を排斥するものでなく、精密規定と相並んで、純粹記述の原本的及び正當なる學的任務は承認さる可きものであるから、精密の本質學の根本部類に屬するものとしての數學とは、全く異なる記述的本質學の根本部類に屬するものとして、純正現象學は成立するのである。

(B) 純粹意識の一般的構造 純粹體驗範域の最一般的本質諸特性の中で、我々は先づ反省を考察する。是れ反省は普遍的的方法的機能を有するものにして、現象學的方法是全く反省の諸作用の中に行はれるのであるからである。要するに反省は、體驗流が其の一切の多様な出來事 (體驗

諸要素諸志向)を具有しつゝ、明らかに把握され分拆し得られる諸作用の一稱號、つまり意識一般の認識に對する意識方法 (die Bewusstseinsmethode) の稱號である。併しまさしく此の方法に於て、反省其物は可能的研究の目的物となる。反省は又本質的に相屬する體驗諸種類に對する稱號であつて、かくて現象學の主要なる一章の題目である。

反省に就て先づ注目す可きは、總ての反省は意識變化或は變容 (eine Bewusstseinsmodifikation) の性質を有することである。(但し此處に變化或は變容と云ふは、つまり各反省は本質的に立場の變化から生起し、夫轉化をなすこと、まさしく反省されたる意識 (或は意識されたるもの) の様式に轉化することだけを意味するのである。) そうして本質法則的には、各體驗は種々なる方向に於て、反省的變化に導かれ得るのである。此處に現象學の任務は、反省と云ふ稱號の下に包括される體驗變化の總體を、夫れが本質關係に立つ處の、又夫れが前定する處の、一切の變化と結び附けて、組織的に研究することである。(但し後者變化は、各體驗が其の原本的進行中に受けねばならぬ本質變て行はれると考へ得られる變化の) 諸種類を、意味するものである。)

今體驗は夫れ自身に於ては生成の一流 (ein Fluss des Werdens) (體驗の生きたる「今」が、其の「前」及び夫れ自身流動する一階段によりて媒介される、把住及び豫想の絶へざる流れ) である。他方に於ては、各體驗は復現の諸形式 (原本的體驗の觀念的探もの) に於て、其の平行者を有する。(つまり各體驗は想起に於て、又可能的豫想に於て、可能的純現象に於て、更に或は對像を有す) そうして相平行する一切の體驗は、一の共同的本質持續の體驗として考へられるのである。

で、かくて同一の志向的對象を意識せるものである可きである。其等の變化は觀念的に可能なる變化として各體驗に屬し、かくて總ての體驗に於て行はれると考へ得られる觀念的操作を表示するから、無限に繰り返し得られるもの、變化されたる體驗に於ても行はれる可きものである。併し我々は又之れと逆の方向に於ては、既にかゝる變化と認められたる總ての體驗から遡りて、一定の原體驗或は「印象」(現象學の意味に於ては、絶對的に
原本的なる體驗を表示するもの)に到達するのである。

我々は其等の變化を、反省されずに意識されたる現在の體驗に、原始的に結び附け得るが、其の際には其等の原始的變化に、一切の反省されて意識されたるものが、自から參加せねばならぬことが、直ちに覺られる可きである。今反省其物(此の自我が自から己を其の體驗の上に向けると云ふこと、及諸作用が成就せ
れると云ふこと)は確かに一の新しき性質の一般的變化である。併しまさしく反省が直覺的或は空虚的把握と交錯することが、反省的變化の研究を、上に述べし諸變化の研究と必然的に交錯させるのである。

我々は只反省的に穿鑿する諸作用によりてのみ、體驗流及び夫れを純粹自我に必然的に結び附けることに就て、或物を學び得るので、かくて我々は夫れによりて體驗流は同一の純粹自我の認識諸作用の自由遂行の一分野であること、又體驗流の一切の體驗は、純粹自我が夫れを注視して、或は「夫れを通じて」他の自我と異なるものを見ることが出来る以上、純粹自我に屬するも

のなること等に就て、或物を學ぶのである。そうして我々は、此等の穿鑿は縮少されても矢張り意味及び權利を有することを確信し、かくて一般的本質普遍性に於て、右の如き性質の穿鑿一般の權利を承認するので、まさしく夫れと平行して、體驗一般に結び附けられたる本質諦觀の權利を、承認するが如くである。

かくて我々は最とも完全なる明亮に於て、又無制約的妥當の意識に於て、左の點を洞察するのである。即ち體驗は只內在的知覺の反省的意識の中に與へられて居る以上に於てのみ、認識的に確かめられて居ると、或は體驗は只當面の現在的「今」に於てのみ確かめられて居ると考へるは、正當でないこと、又注視を後へ向けるに當つて、「尙ほ」意識されて居るとして現前に見出されるもの(直接把住)の存在せることを疑ひ、更に注視の中に現はれる體驗は、結局はまさしく其の事によりて全く異なる或物に轉化するのではないかと疑ふは、理に悖れるものなること。我々は一切の「原理の原理」即ち完全なる明亮は一切の眞理の尺度であると云ふこと、及び所與に忠實なる表現を與へる言表は、如何に美はしき議論をも、敢て意に介するを要しないと云ふことを、忠實に遵奉することが肝要である。そうして以上述べ來れる處によりて、我々は現象學は、經驗的心理學に於て屢々內的經驗の價値の拒否、或は其の不適當なる制限に導ける處の、方法論的懷疑に襲はれないものなるを覺るのである。

却説反省の一般的本質及び意義は、是れまで述べ來れる處によりて大體上究明したと思ふが、今更に進んで先驗的に純化されたる體驗領域の一般的本質特有性を考究せんとするに當つて、先づ我々が當然注目すべきは、各體驗と純粹自我との關係或は結び附きである。夫れ總ての「我思ふ」は自我の作用として特質附けられ、自我から發生し、自我に於て「現實的に」「生きて」居る。そして現象學的判斷抑制を行ひ、自然的主張の全世界と同様に、「自我、人間」をも絶縁に附するも、尙ほ純粹自我は其の特有の本質を具有してあとに残る。(如何なる絶縁も「我思ふ」と云ふ形式を去ることは出来ない。體驗は總て自我から發生するか、又は反對の方向に於ては自我に歸する。そうして此の自我は純粹自我にして、如何なる還元も之を襲ひ傷ける事は出来ない。) として此の純粹自我は全く本質成分を有せず、説明し得られる内容を有しない。夫れは夫れ自身に於ては記述し得られないものである。かくて體驗其物と體驗の純粹自我とが區別され、體驗領域の本質に於て、一定の非常に重大なる二面性が認められる。我々は其の一を主觀的に方向附けられたる方面、其の二を客觀的に方向附けられたる方面と云ふことが出来る。

次に我々は一切の體驗の一般的特有性として、現象學的時に注目せねばならぬ。現象學的時はあるがまゝの體驗に本質的に屬するものにして、宇宙的時と一定の仕方にて類似するが、根本的には異なるものである。吾人は宇宙的時の如くに、物質的手段を以て現象學的時を測定することが出来ない、更に夫れは一般的に測定され得ないものである。尙ほ現象學的時は一般的に個

々の各體驗に屬するものであるのみならず、更に體驗と體驗とを結合する一の必然的形式である。

(各現實的體驗は必然的に持續的なるものにして、そうして此の持續を以て持續の一の無限的連續中に入る。夫れは必然的に總ての方面に於て無限的に充實されたる時地平線を有する。即ち夫れは一の無限的なる體驗流に屬する。個々の各體驗は始まる如く終り得る、かくて其の持續を終結し得る。併し體驗流は始まることも終ることも出来ない。各體驗は時間的實在として其の純粹自我の體驗である。そうして之れに必然的に左の可能性が屬する。即ち自我が此の體驗の上に其の純粹自我注視を向け、現象學の時於て現實に實在するとして或は) 更に本質的に左の可能性が認められる。即ち自我は時間

的所與様式に注視を向け、如何なる持續的體驗も、所與様式の連續的流れの中に於ける過程或は持續の統一なるものとしてなくは、可能的でないことを明證的に認識し、更に此の時間的體驗其物の所與様式は矢張り一の體驗(新しき種類及び次元のものであるが)であることを認識すると云ふことである。

(例へば始まり終はり又其の中間に持續する喜悅を、我は先づ其の儘に純粹に注視し、其の時間的諸階段を其儘に追ふて行くことが出来る。併し我は又其の所與様式に注意することが出来る。即ち「今」の當面の様式に注意し、夫れより此の今に於て、必然的連續に於て、一の新しきもの、又絶へず新しきものが結び附くと、夫れと共に各現在の今が丁度今に化し、其の丁度今が更に又連續的に、丁度今の益々新しき丁度今に化すること等に注意し得る。新たに結び附く處の各々の今に對しても同様である。現在の今は、然的にして、益々結び附く新しき質料に對する一の連續的形式である。「丁度今」の連續にありても同様である。夫れは益々新しき内容の諸形式の一連續である。そうして此の事は同時に喜悅の持續的體驗は恒久的形式の一の意識連續に於て、與へられて居ることを意味するのである。此の恒久的形式と云ふは、即ち先づ把住の一連續の機械階段としての印象の階段、次に連續的志向的に相互に結び附けられる把住、或は把住と把住との連續的交互と云ふ形式である。此の形式は常に新しき内容を受け入れ、かくて連絡的に、體驗今が與へられて居る各印象に附け加はる。そうして印象は連續的に把住に化し、把住は連續的に變更されたる把住に化す。以下同様。尙ほ連續的化生の反對方向がある。即ち「以前」に對應して「以後」、把住の連續に對應して豫想の連續が存立する。)

尙ほ進んで考へると、各體驗今は、必然的に其の「以前への地平線」を有する。併し夫れは決して空虚な以前、内容なき空虚な形式であり得ない。新たに始まる各體驗には、幾多の體驗が必然

的に時間的に先立ち、體驗過古は連續的に充實されて居る。併し各體驗今は又其の必然的なる「以後」の地平線を有する。そうして夫れも亦決して空虚な地平線でない。各體驗今は必然的に新しき今に化成し、其の今は必然的に充實されて居る。體驗流は一の無限なる統一にして、流れの形式は純粹自我の一切の體驗を必然的に包む一形式である。

併し各體驗は時間的繼續の見地の下で、本質的に完結せる一の體驗連結中に入るのみならず、更に同時性の見地の下に於て同様である。即ち各體驗今は一定の諸體驗の、即ちまさしく矢張り「今」の原本性形式を有し、そうしてかゝるものとして純粹自我の一原本性地平線、其の全體的原本的意識今を作る處の諸體驗の、一地平線を有するのである。統一的には此の地平線は過古様式の中に入る。各瞬間前は變化されたる今として、夫を瞬間前として有する處の注目されたる各體驗に對して、一の無限的地平線(此の變化されたる今に屬する總てのものを包括する)、約言すれば其の「同時的にあつた」の地平線を含む。かくて上に述べし事は、一の新しき次元によりて補はる可きである。そして此處に我々は純粹自我の全現象學的時間領域を有するので、純粹自我は其の何れの體驗に就ても以前、以後、同時の三次元に從ふて考へ得るのである。要するに一の純粹自我と、總ての三次元に於て充實され、此の充實に於て本質的に相接合し、其の内容的連續性に於て相互に他を要求する一の體驗流とは、必然的相關者である。そうして右に究明せる意識の原形式から本質法則的に、我々は意識

の幾多の本質特有性を闡明し得るのであるが、體驗流がカントの云ふ觀念イデア或は理念の意味にて、一の統一體として把握されることは、其の重要な一である。

我々は是れより更に體驗の一特有性にして、客觀的に方向附けられたる現象學の一般的主題と稱し得られるもの、即ち志向性 (*die Intentionalität*) に就て考察する。何れの體驗も何れかの仕方にて志向性を有する以上、志向性は體驗領域一般の一の本質特有性である。實に意識を精密な意味に於て特質附け、全體驗流を意識流として、又一の意識の統一體として證示するものは、志向性である。そうして此處に志向性とは、つまり「或物の意識である」と云ふ體驗の特質を云ふのである。一切の現實的「我思ふ」に於て、純粹自我から發出する「注視」が、當面の意識相關者の「對象」の上に向けられ、そうして其の對象に就て種々なる意識が成立する。併し總ての體驗或は意識に於て、志向性は顯在的であると云ふのではない。夫れか潜在的である場合もある。

嚴密に云へば我々は、第一次的内容と稱し得られる總ての體驗と、志向性の特質を本來具有する體驗或は體驗要素とを區別せねばならぬ。一切の感覺的體驗、感覺内容は前者に屬するので、そうして我々はかゝる具體的體驗與料を、全體として志向的なる處の、より包括的なる具體的體驗に於て、構成要素として見出す。實に其等の感覺的諸要素の上に、云はゞ一の「活氣つける層」、意義を給附する層、即ち夫れ自身に於ては全く志向性を有ない感覺的なるものから、まさしく具

體的志向的體驗が依て以て生まれる一の層が、存在するのである。

右の感覺的質料と志向的形式との二重性及び統一性は、全現象學的範域に於て、重大なる役目を演ずるものである。(實際に於て、我々が何等かの明亮なる直觀或は評價、意欲等を心中に浮べるとき、質料と形式との料は種々なる階段の志向的形成或は意義給附に對する質料として、與へられるのである。)

此處に術語に就て少しく述べて置くが、我々は第一次的内容と云ふ語も、亦感覺的體驗と云ふ語も、共に不完全或は不適當と考へるので、此等の語を斥けて、質料的與料(hyletische oder stoffliche Data)或は單に質料と云ふ言を用ひ、又材料を志向的體驗に形成し、志向性の特質をもち込むものをノエジスの要素(noetische Moment)或は簡單にノエゼ(noese)と云ふ。かくて現象學的實在の流れは、質料層とノエジス層(eine stoffliche und eine noetische Schicht)とを有するのである。そうして特に質料的なるものに施される現象學的考察及び分析は、質料的現象學的(hyletisch=phanomenologische)と稱せられ、他方に於て特にノエジスの要素に關するものはノエジ斯的現象學的(noetisch=phanomenologische)と稱せられることが出来る。

これは最大問題は機能的問題(die funktionellen Probleme)或は意識對象の「構成」の問題である。此等の問題は例へば自然に關して、ノエゼ(質料的なるものを生かし、多樣的統一的連續及び總合に纏り合はせつ)が或物の意識を、夫れに於て對象の客觀的統一が萬人一致的に表はされ、示され、且つ理性的に規定され得る様に、成就する仕方に関するものである。(此の意味に於て機能は、全く特異なる或物、ノエゼの純粹本質に基づくものである。意識は或物の意識である。云はゞ心意、精神、理性の意識を、夫れ自身の中に包蔵するものが、意識の本質、「意義」である。意識は「心理的復合」、「融合する諸内容」、「感覺の束或は流、即ち夫れ自身に於て意義を有せず、又如何なる結合に於て、何等の「意義」をも産出し得ないものに對する「稱號でなく、徹頭徹尾「意識」一切の正理及

は不正理、一切の正當及び不正當、一切の實在及び假想、一切の價值及び不價值、一切の正行及び不正行の根元である。かくて意識は感覺主義の認めんとするもの、夫れ自身に於て無意義な、不合理的な(合理化し得られるが)資料とは、全然異なるものである)機能の見地は現象學の中心の見地にして、其の見地から發出する諸研究は、殆んど現象學的範域全體を被ふ。そうして結局一切の現象學的分析は、構成分或は低い諸階段として、如何様にかして右の見地からの研究に利用されるのである。個々の體驗に附着する分析及び比較、記述及び分類に代りて、諸個別を其の「目的論的」見地の下に考察することが、「總合的統一」を可能ならしめる爲めに行はれる。此の考察は、本質的に體驗其物、其の意義給附、其のノエジス一般に於て、云はゞ大體上表示され、云はゞ夫れから引き出さる可き意識多樣に加わられる。此の考察は、如何にして、客觀的にして眞に内在的でない各種の諸統一が、「意識された」か、「考へられた」か、如何にして甚だ相異なるもの、しかも本質的に要求されたる構造の意識諸形態が、考へられたるもの或は意味されたるもの、同一性に屬するか、又如何にして其等の諸形態が方法的に嚴格に記述さる可きかを探究せんとする。更に此の考察は「正理」及び「不正理」の二重稱號に對應して、各對象的領域及び範疇の對象性の統一が、如何にして意識的に「證示」され又「排斥」され、思惟意識の諸形式に於て規定され、「詳しく」規定され或は「異なつて」規定され、或は全く「無」として「假相」として廢棄され得又されねばならぬかを、探究せんとする。かくて夫れは最包括的普通性に於て、各領域及び範疇の客觀的諸統一が、如何に「意識的に構成される」かを、探究せねばならぬ。其等の客觀的諸統一の現實的及び可能的意識の一切の結合が、其等諸統一の本質によりて、如何に大體上指示されて居るかを、組織的に示すことが必要である。可能的意識の一切の根本的種類

及び本質的に之れに屬する變化、融合、總合等を、本質的普遍性及び現象學的純粹性に於て、組織的に研究し、闡明することが肝要である。如何にして、其等のものが其特有本質によりて、一切の實在可能(及び實在不可能)を大體上表示するか、如何にして、實在する對象が完全に規定されたる本質内容の意識結合に對して、絶對的に確定せる本質法則に従ふて、相關者であるか、又之れが反面として右の如くに形成されたる意識結合の實在が、如何にして實在する對象と同價値であるかを、研究し闡明せねばならぬ。

現象學は其の純粹本質學的な、各種の超越を絶縁する立場を固持する以上、其の特有なる純粹意識の地盤に於て、特殊的なる意味にて先驗的なる諸問題の上述の全複合に、必然的に到着するので、かくて先驗的現象學の名に値するのである。現象學は其の特有の地盤に於ては、單に存在するだけで何物をも意味しない處の、死んだ物件或は「内容複合」として、體驗を其の諸要素、複合構成に従ひ、部類及び小部類に従ふて考察す可きでなく、體驗が志向的體驗として呈出し、全く其の本質學的本質によりて、「の意識」(“Bewusstsein= von”)として呈出する特別な問題論を、特有するに至らねばならぬ。

云ふまでもなく純粹質料論(die reine Hyleik)は先驗的意識の現象學に屬するものである。もつとも夫れは夫れ自身に於て完結する一學科の性質を有し、又かゝる學科として夫れ自身に於て價値をも有する。併し他方に於ては、夫れは志向的織物に可能的横系を與へ、志向的形成に可能的質料を與へると云ふことによりて、機能的見地から見て重要な意味を有するのである。